目指すは、病院と在宅医療のシームレスな連携

医療法人あおい会 あおいクリニック
医師 梅田喜亮

昔ながらの街並みが残る大阪府八尾市に2010年開院した「あおいクリニック」。梅田先生は大病院の勤務医から、2016年春に在宅医として入職。携帯型レントゲン機材やエコーの導入による医療機器のパワーアップで、在宅では難しいと思われがちな腹水や胸水の処置も行い、「入院を希望されない患者さんにも病院と同レベルの医療を在宅で提供する」ことを目標に日々頑張っています。エネルギッシュに在宅医療と向き合う梅田先生の想いと理想に迫りました。

病院勤務医から在宅医へ転身

―先生、お若く見えますね! いつから在宅医に?

今年で38歳になります。実は今春2016年4月に、このクリニックに仲間入りさせてもらった"ひよっこ"の在宅医です(苦笑)。それまでは大学付属病院や臨床研究指定病院で呼吸器科の専門医として、がん治療などの高度医療に携わり、また研修医を育てる指導医として、後輩ドクターの学会発表に向けた論文研究のサポートをしていました。

―そのまま勤務医として、キャリアを磨く選択肢もありましたか?

確かに、病院での仕事にもやりがいは感じていました。新薬や最新の医療器具にも恵まれ、環境面・待遇面にも申し分ありませんでした。しかし、高度急性期病院の医師は入院された重症患者さんを治療してご自宅へ帰すことが最大のミッション。終末期や慢性期などで、療養型病院へ転院する患者さんを送り出すことも多い中で、「あの患者さん、大丈夫かな」と気になっても最期まで診ることが叶わず、自分の中で完結しないまま次の重症患者さんを診るという繰り返しに正直、矛盾を感じるところがありました。

そんな時に、あおいクリニックの前院長から「志を受け継ぎ、病院で培った専門知識と経験を訪問診療で発揮してほしい」とお声がけいただいたんです。6年前に開設したクリニックの継続が、ご家庭の事情と体調的なものも重なり困難になり、200名以上の患者さんを任せられる後任ドクターを探しておられたということでした。何度かクリニックの皆さんと現場へご一緒させていただく中で、患者さんのために医療スタッフ一丸となって朝から夜まで汗する姿に、衝撃と感銘を受けました。「僕も"チームあおい"の仲間に入れてください!」と衝き動かされるような熱い想いが湧き上がったんです。

機材と体制が整えば大半の治療は在宅でも可能

―現在の"チームあおい"のメンバー構成を教えてください。

ドクターは2人。私と外科系のドクターがお互いの得意分野を生かし、患者さんを分担しています。さらに放射線技師1人、看護師2人。往診相談があった際の対応、訪問診療のスケジュール管理、診療車両の運転対応までしてくださる相談員3人の合計8人体制です。

―常勤の放射線技師まで!?

はい、患者さん宅でレントゲンとエコーの機材を持ち込み、技師と一緒に検査も行います。例えば進行性の肺がんや感染症で胸水が溜まった患者さんの処置をする場合、水を抜いた後の状態確認はレントゲン撮影が一番早くて確実ですから。訪問先で溜まった胸水や腹水を抜く処置をすると「そんなことまで在宅でできるの!?」と、訪問看護師さんにもよく驚かれます。

―在宅医療の限界はない?

もちろん、MRIや造影CTなどの高度医療器材を使った検査はできません。足りない物品を薬剤部へ電話1本かけるだけで届く病院のような便利さもありません。ですが、エコーとレントゲン検査はできる、心電図も計測できる、患者さん宅で採血してそのまま検査に提出することもできる、抗菌剤などの新薬も積極的に購入して使用することができる。「病院ならできる・クリニックでは難しい」と、僕自身も病院の医師だった頃は勝手に線引きしていたのかも知れません。でも実際は、必要に応じた機材・薬剤・管理体制が整えられたら、病院でできる大半の治療は在宅医療でも可能なんだと分かりました。

医師としての欲をいえば、慢性閉塞性肺疾患(COPD)や脳梗塞後遺症の患者さん向けのカフマシーン(喀痰排出補助装置)、終末期の患者さんのための24時間体制の薬剤投与の充実(シリンジポンプなど)が在宅でも可能になれば、パーフェクトに近い。これらの実現には、機材や薬剤の導入はもちろん、訪問看護師さんの協力が不可欠。少しずつ焦らず体制を整えていけたらと考えています。

病院に入院せずに完治・完結できる医療を目指して

―病院と在宅のドクターの差は何でしょうか?

医師として活躍のステージが変わるだけ。患者さんの医療をどの現場で実践するのか?という違いだけだと思います。病院で働いていた頃は、入院患者さんが歩いてご自宅へ帰れることを目標にしていましたが、在宅医である今は、「病院へ自力で通えない」「入院したくない」という患者さんを、入院しなくても完治・完結できる医療を目指すようになりました。

病院とは違う忙しさ、充実感も感じています。1日に15軒前後の患者さん宅を往診するのですが、お昼ご飯を食べずに待っていてくださっていたり、玄関先で膝を折るように深々とお辞儀して見送ってくださったり、こちらが恐縮することばかり。だからこそ「忙しさを言い訳に漫然と流すような診察になっては絶対にダメだ」と肝に銘じています。1回ずつの処置をきちんと評価し、次の治療プランを立てる。その繰り返しを丁寧にやってゆくつもりです。

最近は、看護師さんから「火曜日に熱が出ていた患者さん、もう一度念のため見に行きませんか?」「次の訪問日はまだ先ですけど、週末に採血だけでもしておきますか?」と提案してくれることも。チームワークに恵